

12 郭林新気功

中国では無償でも日本では高くつく気功術

Internet で探した K 市の O 病院の情報から、中国では郭林という人物が気功で癌の再発や増大を防いで、癌と共存する呼吸法を提唱していることが分かった。中国には健康法としての気功が数百とある。有名な太極拳も健康法として普及している。Internet で調べたところ日本でもそれをやっている三心会という任意団体があることが分かった。

前章で触れたように、再発が分かったあとすぐこの団体が早稲田で週一回行っている教室へ参加した。集まっている人は、癌の宣告を受けてとりあえずの治療が成功した人、再発した人、まだ手術などの処置をしていない人など、各人各様であった。主催している M 氏夫婦は癌患者ではなく、もともと中国から日本へ生薬や健康食品などを輸入する会社にいたらしい。その間中国で郭林新気功に出会って、それを日本で普及しているうちに、家業になったようだ。

すなわち M 氏は自分の生活の糧として郭林新気功を普及している。後で知ったが、中国ではこの気功の普及は無料を原則としている。郭林氏は患者の弱味につけ込んでお金で健康法を教授することを厳しく禁じていたのだ。M 氏はそれでは食べられないので、入会金、年会費、12 回分前払いの講習費、種々の出版物の売上げ、中国では本来格安の図書や道具・video を結構の値段で販売する、気功の研修旅行(国内と中国)などいろいろな方法で患者から収入を得ている。これは本来郭林老師の意向に反する行為であるが、日本では他の類似健康法も同じようなことをやっているのだから、M 氏もただ高いか安いかの問題と認識しているようである。

11 月に入会し、毎週 1 回 1 時間程度の集団練習と自宅での連日の数時間にわたる個人練習を始めた。三心会の教え方は甚だ手抜きで、少し古い練習生が入門者に教える、という方法を採用していた。M 夫人は M 氏より気功の型もよく、教えるのも巧かったが、すべての初心者を手取り足取り教えるという訳ではなかった。実際には、抗癌剤の投与によって寝ていた分や 1 月中旬からの T 病院への入院などで、練習は中断を余儀なくされた。

本物の郭林新気功との出会い

新年になって、北京に帰っていた中国人の友人 G 氏が中国の郭林新気功を普及する団体から出されている公式入門書とそれに基づく VCD (video) を探して来てくれた。これを観るとどうも日本で M 氏夫妻が教えている形と違うような気がした。また、M 氏はこの気功の原理面での理解が不足しているような気がした。そこで、北京へ行って中国の公式の団体で教えを乞うことにした。

別の中国人の友人 Y 氏が北京のいくつかの公園で練習しているところへ行き、指導者にいろいろと状況を訊いてくれた。入門書を探してくれた G 氏が個人指導をしてくれる S 老師を当たってくれた。幸いこの S 老師は友人の Y 氏が持っている新築のマンションの近くに住んでいることが分かった。友人 Y 氏がこのマンションを貸してくれるというので、このマンションと S 老師宅の間にある大きな公園で個人指導を受けることに決まった。

正月早々には北京行きを決意したにもかかわらず、T 病院への入院や川越の O 病院や X Knife で K 病院を受診するなどいろいろなことが重なり、結局友人 G 氏が 4 月に帰国するのと一緒に北京へ行き、S 老師に紹介してもらうことになった。この間三心会には何回か通ったが、人によって指導の内容が変わり、やはり正しい原則の下で学ばないと意味がないような気がした。

妻が夢にまで見た最後の北京行き

妻の中国語はまだ不十分だったので、都立高専の授業を 1 回休んで中国語が出来る私が同行

することになった。北京空港には友人 Y 氏も出迎えてくれて、かれの二つめの新築未入居のマンションへ案内してもらった。警備員付きの 170 m² ほどの豪華マンションである。この広さが、雨や風が強く柳絮(柳の花)が激しく飛ぶ日の屋内練習に役立った。

高級気功師 S 老師は 19 年も癌患者をやっていた

日本料理屋での夕食に S 老師を招いて紹介を受けた。高級気功師という肩書きで、郭林老師の最後の頃の直弟子だそうだ。S 老師自身も 19 年前の 45 歳のときに直腸癌を切除していて、それからいくつかの再発を手術で取りながら、腫瘍の増大を郭林新気功で押さえている、との説明を受けた。最近また肺への転移が見つかり、再度摘出するそうである。すなわち気功は癌を治すのではなく、癌が牙を剥くのを押さえるのが目的なのだそうである。日本の三心会ではこのような経験談はほとんど聞けなかった。会を発足してから日が浅いためか、症状が重い人は来ないのか、あるいは妻のように進行している人は気功の効果もなくすぐ死んでしまうのか、たいした状態ではない人だけが練習に来ていたようであった。

ここで気功を習った患者の 5 年後の平均生存率は 85% 程度だと説明も受けた。個人教授の場合は、気功の協会に外国人は US\$150 払えば、完全に master するまで何回でも面倒を見てくれるそうである。入門の全課程を習得するには早い人で 7 日、遅くても 10 日あれば十分で、数ヶ月後にまた北京に行けば型を修正してくれるとのことであった。

日本と中国で物価が違うといっても、日本では直接指導ではなくて 1 年以上かけ 15 万円も支払っても、入手した公式入門書の基本水準すら終了しない。

本場の気功は素人のお稽古事ではない

S 老師は癌の患者は進行しているので、そのようなお稽古並みのやりかたではだめだと言われた。ここで気功を習っても、かなり進行してしまっている妻の転移巣に対して効果が出るかどうか分からないが、日本で感じていた割り切れない感じは完全に拭うことができた。

翌日から午前と午後、各 1 時間半の練習が始まった。S 老師はまず妻がすでに習った気功の練習を見て、一番大切な呼吸法が間違っていると教えてくれた。日本では、こうせよと教わっていて誰も直してくれなかった。昨年の夏にでも習いに来るべきだった、と先に立たない後悔をした。妻は、友人のマンションの居間の大きな鏡に向かって約 10m の練習 course を確保し、夜も復習して見る見るうちに上達し、1 週間めにはほぼ基本水準を身につけてしまった。

妻は北京での生活を満喫した

SARS の嵐が吹き荒ぶ北京で食事をしたり、自由市場で買い物をしてマンションの台所の使い初めをしたりして、妻は残り少ない人生の最後の楽しみを享受した。夜や気功が終わって休んでいるときには、妻は大好きな京劇を専門に放映している TV channel に噛りついた。京劇は中国語の字幕が出るので、意味はだいたい理解できた。これだけでも、日本で訳がわからないまま気功の練習をするより、妻には価値があったと思う。

心の支えを用意せよ

癌で余命が少なくなった人は、何も希望が無くなってしまおうと、自暴自棄になったり、泣いたり落ち込んだりと精神的な care がたいへんだという話であるが、妻の場合は気功を行うことにより無心になることができ、精神的には大きな支えになった。

無心になって気功をして、普段は数分の 1 しか使わない肺の機能をすべて使い切ることにより、全身に新しい血液を静かに循環させることができる。人間本来の免疫機構がまだ十分機能していると、この強力な循環力により身体の隅に隠れた癌などの疾患細胞に NK(Natural Killer) 細胞を送りつけることができるという、理屈らしい。その機序は分からないが、練功 気功の訓

練)をした後は必ず十分な休養を義務づけられている。休んでいる内に、副交感神経の管理下に身体を任せて置くことにより、免疫細胞の活動力を上げようという考えであろう。実際に練習後に休むと身体がポカポカとして、とてもよい気持ちで眠れるのだそうである。これだけでも、癌の恐怖におののいて効果が低い抗癌剤の副作用下で生活するよりずっとましであった。

気功に身を委ねて過ごした日々

結果的には妻の進行癌は気功の力では進行を大きく制限することはできなかった。4月の最後にG病院で撮ったCTによると、肺の転移巣は大きくなっていった。妻を含めて家族は、妻の命は長くても晩秋の彼女の誕生日までと理解した。秋口まで生きていれば万々歳と覚悟を決めた。G病院のA医師の説明の際に脳への転移の可能性を聞いたが、大丈夫だろうという返事だった。ただ、hospisなど末期緩和病棟への入院を考えておくように忠告された。

帰国してから1ヶ月近く、妻は毎日5~6時間の気功の練習に打ち込んだ。気功をしている間はとても充実していて、車の運転すらするようになった。中国語も前年の秋以来通っていた早稲田大学の学外向けのH先生の講座が終了し、気功のS老師とも話しが出来る程度に上達したので、4月から休みがちなながらも水道橋の日中学院のH先生のさらに上級のcourseに通いだした。しかし、5月の最後の授業に私が車で送り迎えしたのを最後に日中学院の授業には出られなくなった。H先生は非常に熱心に予習していく妻をととても誉めてくれた。妻は気功の中国語を私の助けなしで理解したいという明確な目標があったので、そのようにしたと思われる。

経験豊かな開業医が末期症状を指摘した

しかし、5月の終わり近くになって左の手や足がもつれると訴えた。始めは気功の練習をしている際に身体はどこかをひねったかもしれないと思い、左手を骨折したときに治療してもらった接骨院に行き、筋などを見てもらったが異常はなく、1週間ほど治療をしても状態は改善しないので、6月に入ってすぐ、近所で評判が高い整形外科のS医院を訪れた。

S医院のX線で体部を撮ってもあまり大きな異常は認められなかったので、設備がある別の病院で頭部のCTと脊椎のMRIを撮った。果せるかな、右頭部の頭蓋骨付近に3cm大の転移巣が発見された。また、脊椎にも5mm程度の転移が発見された。

このころから背中に痛みも発生するようになった。痛み止めを処方してもらい、気功を続けた。またしきりと身体が暑いので冷たいものを欲しがった。この時点でわが家では癌が最終段階に入ったことを認識し、余命1~2ヶ月と覚悟を決めた。大学病院や大きな病院ではCTやMRIの検査でも1~3週間くらい平気で待たされるが、緊急で情報が欲しければ、地域の中規模病院なら、次の日でも検査を受けることができる。ただし、これには信頼できる地域の診療所の医師がいないと、診断の後のfollowができないので、だめである。

終末期に人は何に頼るか

郭林新気功に行き着いたのは癌がかなり進行した状態で、医者に言わせると絶望状態からの出発であった。絶望状態になったとき、人は何をやるかということである。宗教に心の安定を求める人は多い。ただ日本人の場合、唯一神を信ずる宗教よりは旧来の仏教などの穏やかな宗教のほうが合っているようである。ただし、旧来の仏教界はこのような末期の患者に対するcareもあまり積極的ではない。多くの宗教がお布施を期待して成り立っている以上、仕方がないことであるが、お布施の多寡で心が救われるかどうかが決まるような主張をする宗教は頂けない。

健康食品に希望を繋ぐ人もいる。別の中国の友人は、西藏の秘薬という漢方薬の情報をくれたりした。一月分で80万円ということである。ここまで来ると、値段の高さでその効き目を

宣伝しているかの感がある。アガリクスなど大きく宣伝しているものも同じことである。

妻の場合、気功をやることで心の平穩を得ることができたが、左半身の痺れと背中痛みが出て、気功をすることが難しくなってしまった。このような状態で5月の終わりに北京のS老師に電話して教えを乞うた。寝ていても身体を動かして気功をなささいというのが、指導内容だった。背中が痛むのは肺などの転移が原因ではないかという推察であった。この推察は見事に当たった。気功はこの後は、bedの上で呼吸に合わせて手足を動かすことで、6月末まで続けることができた。最後に妻は「娘は、気功を続けて回復しようネ、というけれど、私はもう彼女の期待のためにやっているだけで、回復への希望はない、もう練習を止めてもよいか。」と私に訴えた。私はここまで頑張った妻を誉め、私もいつお迎えが来てもいい覚悟であることを伝えた。妻はそれからは、長年買いためた中国映画をLDやDVDで見て過ごす日が多くなった。

もし気功を習わなかったら、妻も普通の人と同じく死を恐れ、生き続けられないことへの無念さで、本人も周辺の家族もたいへんだったと思われる。救われる見込みが完全になくなり、死を目前にした癌患者が最後の日々を安定に明るく過ごす手段を、本人だけでなく家族も真剣に考えておかねばならないことを悟った。

この項終了

©2003 Dr.YIKAI